



## 史跡 纏向遺跡・纏向古墳群保存活用計画書が刊行されました！

### 1. はじめに

桜井市教育委員会では、史跡 纏向遺跡・史跡 纏向古墳群の保存活用計画を策定し、平成28年3月に計画書を刊行しました。

この計画は史跡 纏向遺跡と史跡 纏向古墳群を恒久的に保存し活用していく上での方向性を示したものです。また史跡指定された箇所は纏向遺跡全体のごく一部であり、将来的な指定地拡大や古墳の追加指定なども予想し纏向遺跡全体をその対象としています。計画策定にあたっては、纏向遺跡保存管理・整備活用計画策定委員会の各委員に専門的見地から指導を受け、国や県の関係機関、纏向校区長会、地元区よりご助言を賜りました。ありがとうございました。なお計画書については桜井市纏向学研究センターホームページの刊行物ダウンロードからも閲覧できます。

### 2. 史跡 纏向遺跡・史跡 纏向古墳群について

史跡 纏向遺跡は、平成25年10月17日にわが国における古代国家形成期の状況を知る上で極めて重要な遺跡として史跡に指定をされました。現在、最も保存を急ぐ辻地区・太田地区の2か所が指定されています。辻地区では平成20年度からの一連の調査で、3棟の3世紀中頃以前の整然とした建物群が検出されたほか、建物廃絶後に多量の桃核や剣形木製品などが納められた大規模な土坑が発見され注目を集めました。

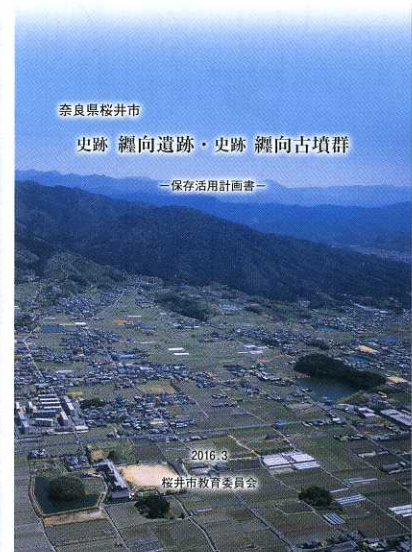
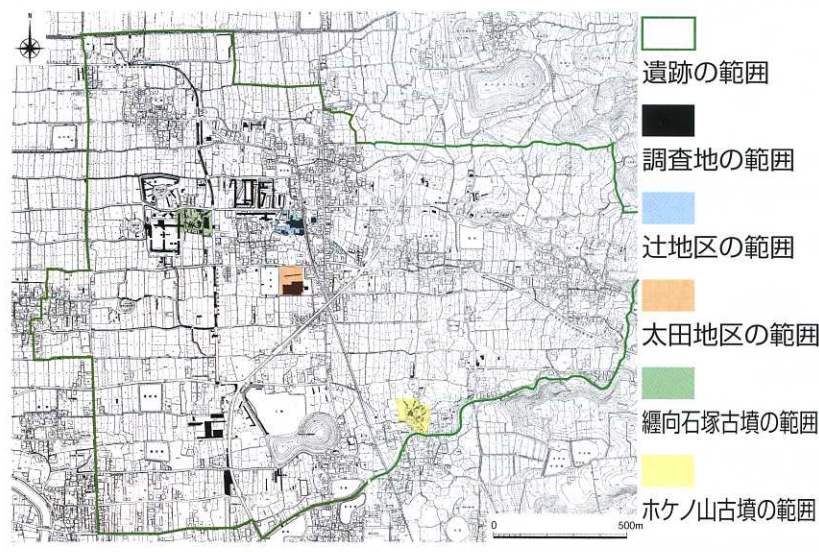


図1 纏向遺跡と史跡の範囲



また太田地区では、掘立柱建物のほか前方後方墳であるメクリ1号墳や、方形周溝墓や木棺墓、土器棺墓など多様な墓制をもつ墓域が検出されており、集落に近接した墓制のあり方を考えるうえで重要な成果を挙げています。

史跡 纏向古墳群は、現在纏向石塚古墳とホケノ山古墳が指定されています。纏向石塚古墳は古墳の盛土や周囲をめぐる周濠からみつかった土器などから、庄内式期に築造されたものと考えられています。ホケノ山古墳では埋葬主体部が調査され、画文帯神獣鏡や鉄鏃、銅鏃、二重口縁壺、小型丸底鉢など多くの遺物が出土したほか、埋葬施設が石囲い木槨と名付けられた特殊な構造をとることが明らかとなっています。両者は古墳がどのように成立していったのかをものがたる重要な墳墓として史跡となっています。

### 3. 保存活用計画策定の目的

この計画は、纏向遺跡と纏向古墳群のどういった点が重要であるのかを明らかにしたうえで、適切に保存と管理をおこなって次世代に受け継いでいくことと、史跡の整備と活用をすすめて地域の活性化に寄与することを目的としているものです。

保存活用計画ではそのための保存活用の基本方針や現状変更等の取り扱い基準、整備・活用・運営などについて今後の大きな方向性を示しています。以下に計画書にしたがって、その概要を述べたいとおもいます。

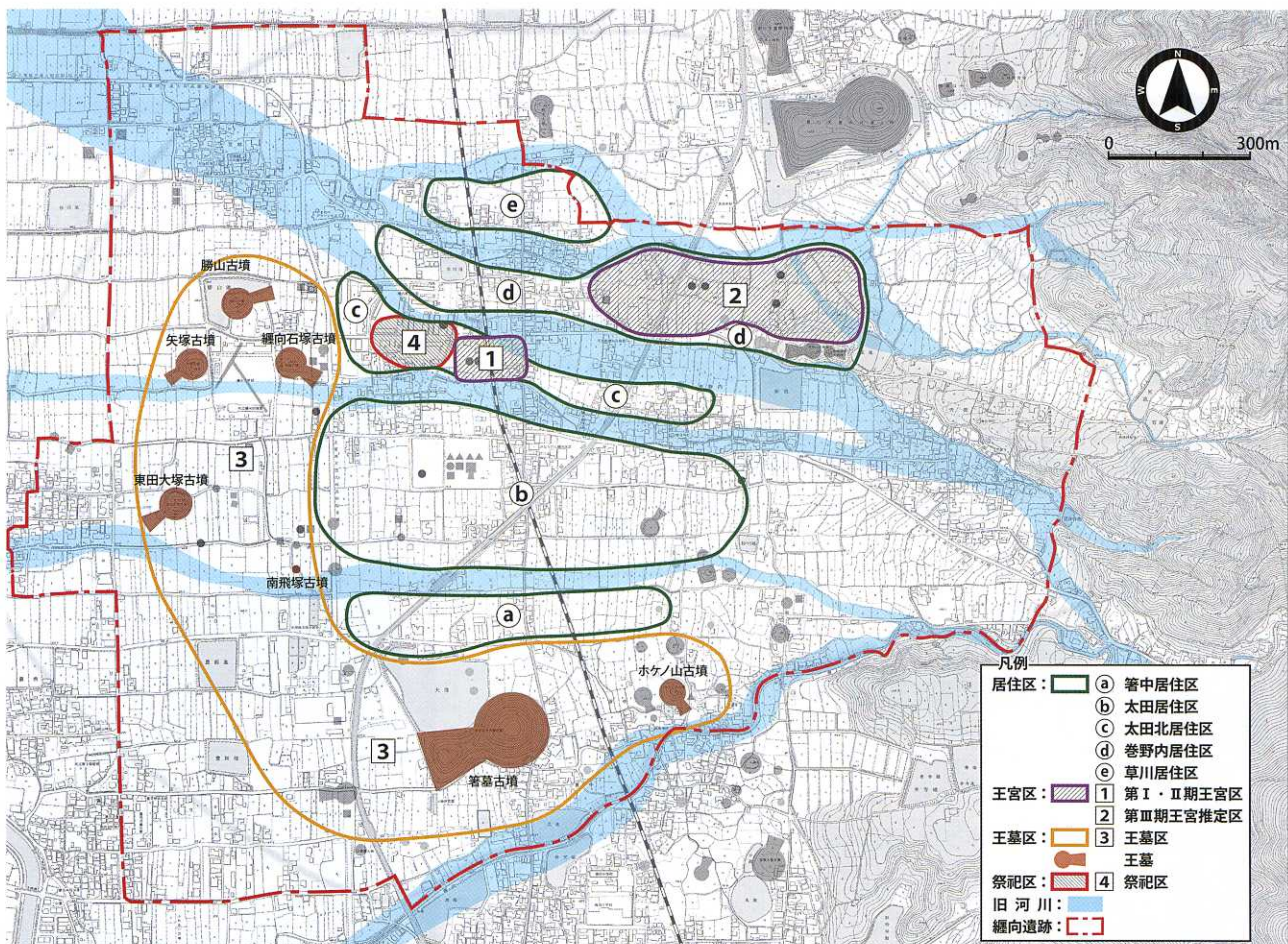


図2 纏向遺跡の構成



## 4. 纏向遺跡および纏向古墳群の全体像

纏向遺跡は奈良盆地を流れる大和川(初瀬川)の右岸に位置し、大和高原より流れ出る小河川によって形成された扇状地上に立地します。南北約2.0km、東西約1.5kmにおよび、非常に広大な遺跡として知られています。

これまでに180回を超える調査を行っていますが、小規模な調査が多いこともあり、全体の約2%が調査されているに過ぎません。詳細な内部構造の検討はこれからの課題です。一方で大まかな遺構分布や旧河川の位置、微高地の形状の検討がすすめられ、地形の検討と現状での調査成果に基づいて微高地に5つの居住区(箸中・太田・太田北・巻野内・草川居住区)と、纏向遺跡の西辺と南辺に王墓区を推定しています。(図2)

このうち太田北微高地では、居住区の中に大型建物や大型土坑を検出した王宮区といわれる纏向型祭祀土坑が多く認められた祭祀区を設定しています。史跡 纏向遺跡は太田居住区と太田北居住区の一部に相当します。この一帯は纏向遺跡のなかでも比較的古い段階の遺構が多く、密度が高く分布し、多くの重要遺構が確認されている地域です。

王墓区の西辺には纏向石塚古墳・矢塚古墳といった古い時期の古墳が作られています。これらの古墳を庄内式期の古い段階(3世紀前半)から築造されたとみるか、新しい段階(3世紀中頃)からとみるか決着がついていません。これらの古墳は王宮区に程近く密接なかかわりが推定され、庄内式期には太田北居住区周辺が纏向遺跡の中核であったと考えられます。また、王墓区南辺にはホケノ山古墳と箸墓古墳が所在しています。

## 5. 保存と管理

この計画では史跡指定地だけでなく纏向遺跡の広範囲を保全するため、継続的な発掘調査をおこない実態を解明するとともに、地域の方々の参加を含めた保護活動を推進し情報発信に努めたいと考えています。

また史跡指定地だけでなく、今後保存管理の対象とすべき候補地域を抽出・区分して遺構の重要性や土地の利用状況などを踏まえて保存管理地区・予定区分を設定しました。今後、こうした保存管理地区・予定区分と取り扱い基準をもとに遺跡内の開発や現状変更に対応したいと考えています。なお史跡の保存管理にあたっては、現状を適切に保存すること、景観の向上に努めること、公開・活用を進めること、土地所有者の財産権を尊重することを方針としています。

図3・4には纏向遺跡の中の区分基準と地域を示しています。A区は現在の史跡指定地を示しています。B区は今後史跡の指定を目指す地区で、その区域が明確となっているものを指しています。C区は重要な遺構の存在が推定されますが、現状では実態が未確認の地区を指しています。C2区は中でも墳丘構造がわからない古墳や、築造された時期のわからない古墳を示しています。D区はA~C区以外の纏向遺跡の範囲をさすものです。

また、纏向遺跡の一部は、大和青垣国定公園、三輪山之辺風致地区、三輪山眺望保全地区に含まれ、纏向遺跡は良好な景観を維持する桜井市の重要な景観資源となっています。こうした関係計画や区域と連携して遺跡の保全を図りたいと考えます。



地区・予定区分		区分の内容	取扱基準および開発への対応基準
A区		史跡指定地を指す。	史跡地内における現状変更の取扱基準に基づき、維持管理や史跡の保存、活用を目的とする遺跡整備以外のものは基本的に認めない。
B区		早急に史跡指定を目指す地区で、範囲確認調査などにより、その区域が明確となっているものを指す。	遺跡地内における開発等への対応基準に基づき、開発者との協議・調整を計り、計画の見直しや中止を求める。
C区	1区	集落域で重要遺構の存在が確認、推定される地域だが、その実態や範囲などが未確認のものを指す。	遺跡地内における開発等への対応基準に基づき、開発者との協議・調整を計り、発掘調査により重要遺構が確認された場合には積極的な保存協議を行う。
	2区	遺跡内に点在する古墳のうち墳丘構造や築造時期などが不明なものを指す。	遺跡地内における開発等への対応基準に基づき、開発者との協議・調整を計り、発掘調査により重要遺構が確認された場合には積極的な保存協議を行う。
D区		『奈良県遺跡地図』で周知の文化財包蔵地に指定されている纏向遺跡の中で、上記A～Cに設定した地区以外の全てを指す。	遺跡地内における開発等への対応基準の方針に基づき、県指定の重要遺跡「纏向遺跡」としての規定にのっとり、調査対応を行う。開発の内容や発掘調査の成果を考慮して遺構の保存や景観に配慮しながら開発を認める。

図3 纏向遺跡の地区・予定区分

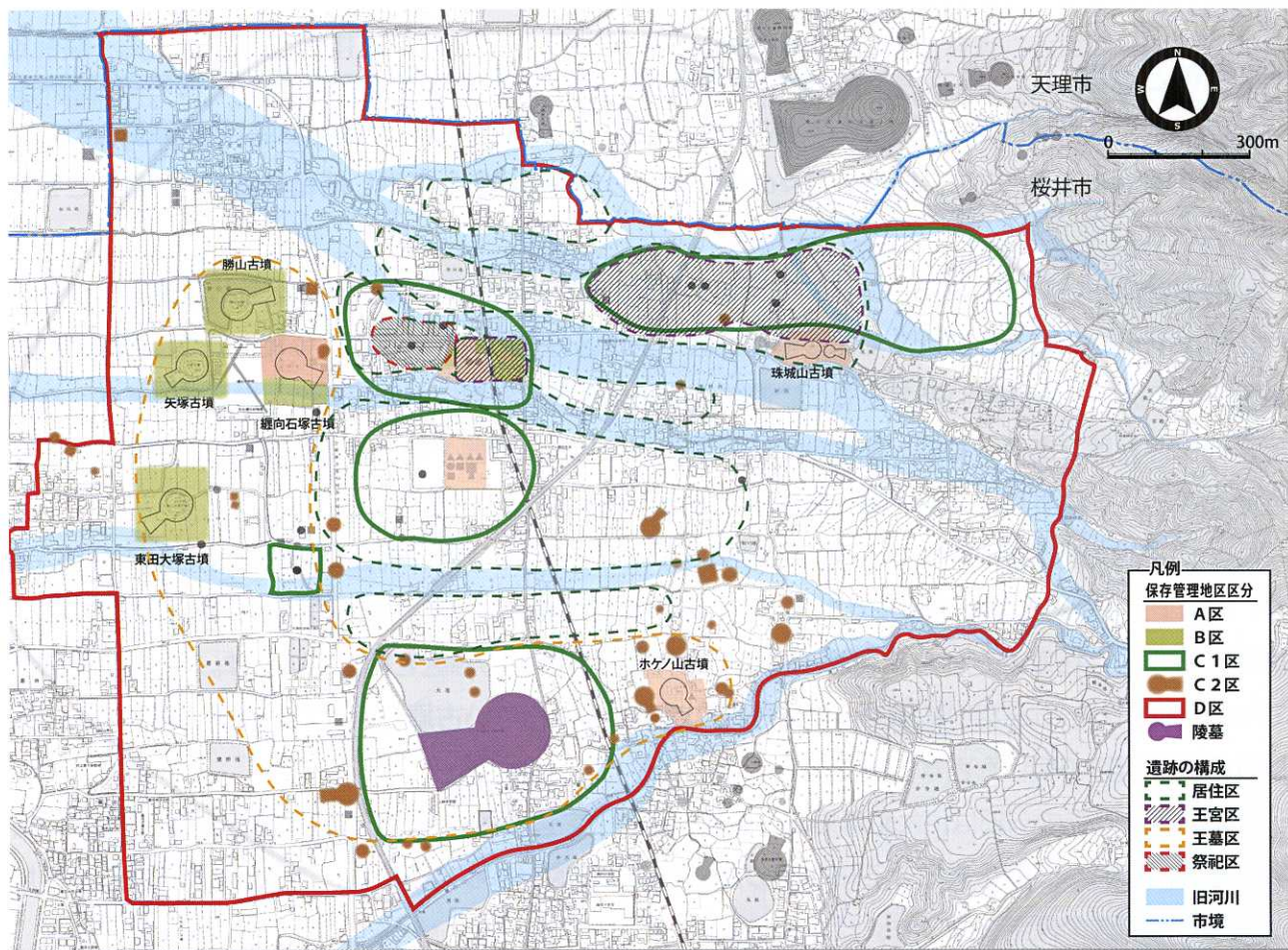


図4 纏向遺跡の地区区分と配置

## 6. 纏向遺跡の活用・整備

整備については、遺跡が広大で史跡指定地や重要地点が分散している纏向遺跡の特性を踏まえて計画する必要があります。

そのため、JR桜井線巻向駅にほど近い史跡 纏向遺跡太田地区で墓域などを復元的に整備するとともに、史跡隣接地にガイダンス機能や地域住民の交流機能などを備えた施設を設置して纏向遺跡の学習の拠点を設けたいと考えます。また必要箇所に休憩所やトイレ、小規模な駐車スペースなどを設け、纏向遺跡を訪問される方が快適に周遊していただける環境を整備していきたいと考えています。

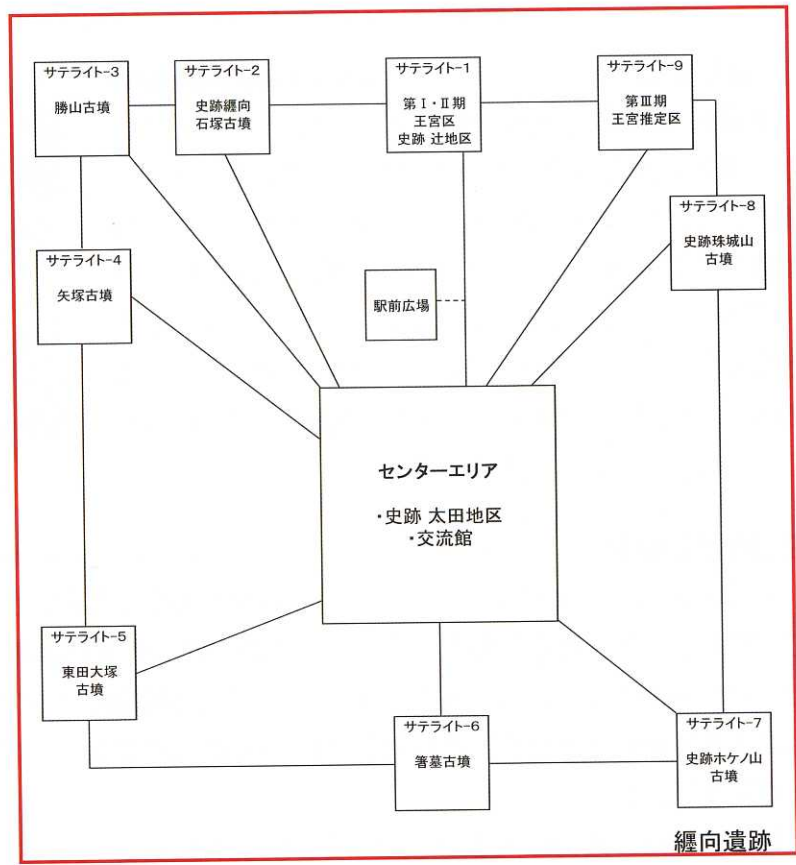


図5 諸施設の配置概念図

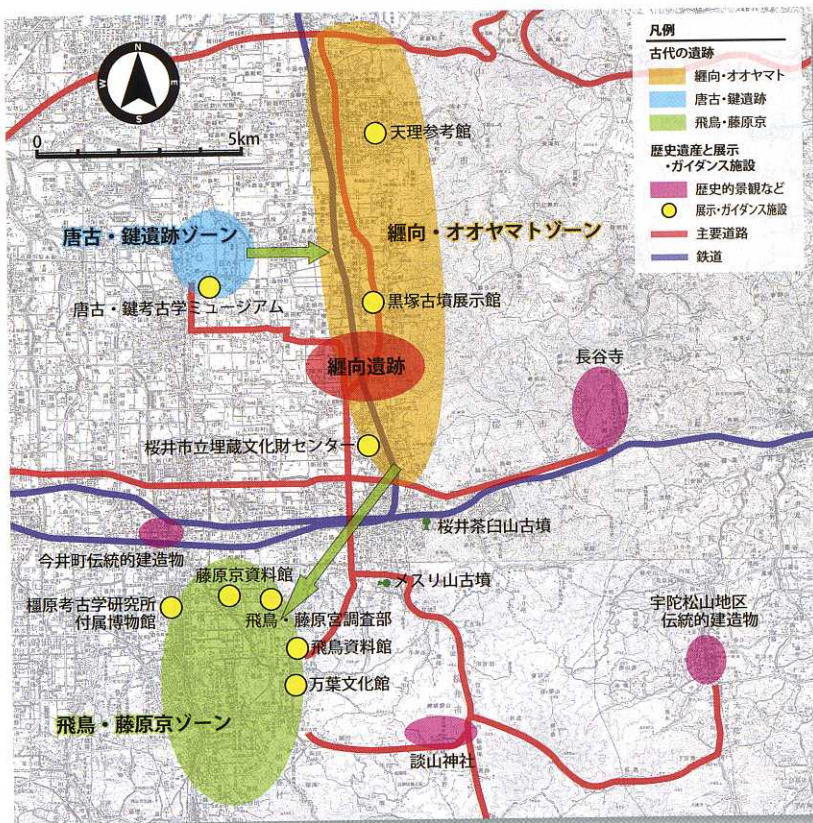


図6 纏向遺跡周辺の歴史遺産と展示施設

また桜井市内や周辺自治体には、唐古・鍵遺跡や飛鳥・藤原京をはじめとした多くの歴史遺産があり、この国の成り立ちを知る上で重要な遺跡が点在しています。また、桜井市には談山神社や長谷寺、大神神社など、歴史を感じる古社寺も多く所在します。

こうした諸団体と連携して新たな取り組みを進めるとともに、今号9ページで紹介した纏向学フォーラムや纏向学セミナーの開催など、積極的な纏向遺跡の普及・広報活動にも取り組んでいきたいと考えています。

## 箸墓古墳周辺第20次調査（纏向遺跡第185次調査）

### 1.はじめに

箸墓古墳は纏向遺跡の南よりに位置し、3世紀中頃から後半に築造された最古の定型化した大型前方後円墳として、全国的に知られています。墳丘の大部分は陵墓として管理されていますが、古墳の周辺では、桜井市や奈良県によって調査がおこなわれ、内濠やそれを取り囲む外堤の存在、後円部南東側の渡り堤、古墳の周りに大規模な落ち込み（外濠状遺構）などがあったことがわかってきています。



写真1 調査区全景（南西から）

### 2.調査の成果

今回の調査は、平成27年の11～12月に箸墓古墳前方部南端から南東方向に約100m離れた場所でおこなわれました。調査の結果、調査区は箸墓古墳の外濠状遺構の中に位置していることがわかりました。この遺構の埋土には、滞水により形成される腐植層と近くを流れる纏向川からなどの一時的な氾濫による砂層などがあることが確認され、外濠状遺構がどのように埋まっていったのかを把握することができました。

箸墓古墳は、最初の大型前方後円墳として評価され、その古墳の実態を明らかにすることは、当該期の歴史の変遷を考える上でも大変重要です。今後も、周辺の調査を積み重ねることによって、箸墓古墳の実像に迫っていきたいと思います。（丹羽恵二）

## 二反田古墳の調査（纏向遺跡第186次調査）

### 1.はじめに

桜井市教育委員会では、桜井市大字大豆越145-1において纏向遺跡第186次調査を実施しました。この調査は調査地における畑地造成に先立つ発掘調査です。

今回の調査は桜井市の北部、天理市との市境付近に所在する二反田古墳の第1次調査としておこないました。調査地は纏向遺跡の集落範囲の北端付近にあたり、周辺には勝山古墳や纏向石塚古墳など纏向古墳群が築造されています。二反田古墳は以前から古墳と認識されていましたが調査はおこなわれていませんでした。

そのため、今回の調査では古墳の墳形や規模、築造時期を明らかにすることが期待されました。調査期間は平成28年1月5日から2月9日までで、調査面積は72㎡です。

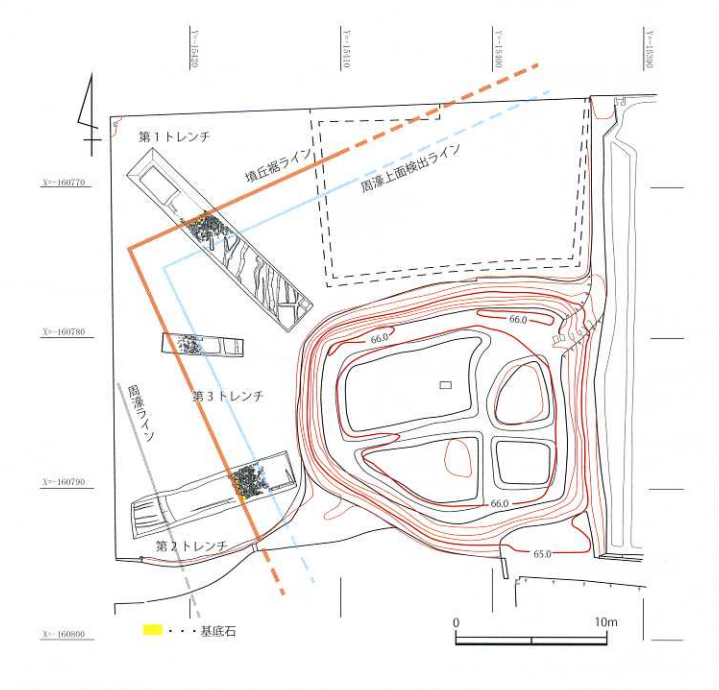


図7 二反田古墳測量図（S = 1/500）

## 2. 検出された遺構と遺物

二反田古墳は現況で一辺約20m、高さ約2mの高まりが残っています。墳丘から北西方向に第1トレンチを、墳丘の西側に東西方向の第2トレンチと第3トレンチを設定し調査をおこないました。

### 葦石

調査の結果、すべての調査区で原位置を保った状態の葦石を検出しました。葦石には拳大の石が使用されており、最下段ではおよそ50cmの基底石を検出しました。基底石は、第1トレンチでは北東-南西方向に続いており、第2トレンチでは北西-南東方向に続いていました。第3トレンチについては、上面検出で留めたため基底石の正確な位置は確認していませんが、第1トレンチと第2トレンチを結ぶ延長部分で周濠上面を検出しており、葦石の裏込めも確認しています。



写真2 第1トレンチ全景（北西から）



写真3 緒付楕円筒埴輪

### 周濠

第2トレンチでは周濠の外側の立ち上がりを確認することができ、周濠の幅がおよそ5.5mであることがわかりました。第1トレンチの調査区内では周濠の外側の立ち上がりを確認することができませんでした。トレンチ内で確認できた周濠幅はおよそ4.5mであり、北東隅で緩やかに地山が上がっていき、調査区外に続いていました。このことから、第1トレンチ周辺の周濠は、第2トレンチで確認した周濠幅とほぼ同じ規模ではないかと推測できます。

### 出土埴輪

今回の調査では多くの埴輪が出土しました。出土した埴輪の多くは緒付楕円筒埴輪であると考えられます。透孔は確認できているもののほとんどが方形でした。突帯には方形刺突が施されており、一部は長方形の刺突を持っています。緒部については、突帯が両面に及ぶものと片側のみのもので、突帯を貼り付けないものといった多様な種類が確認できました。出土した緒部の中には、上部が反りあがっている翼状のような形態のものも出土しています。埴輪の一部には赤色顔料が塗られているものも出土しました。その他にも、形象埴輪や壺形埴輪と考えられる破片も少数ですが出土しています。

## 3. まとめ

今回の調査では3つの調査区ともに葦石を検出することができました。上部の削平された部分以外は良好に残っており、北西から西側の正確な墳丘裾部を確認することができました。今回は古墳の北西側の調査だったため、東側や南側がどれだけ削平されているかわかりませんが、現況の残存している東側の墳丘裾から葦石の基底石までの距離がおよそ30mになることから、墳丘規模が30m以上の方墳であった可能性があります。古墳の築造時期については、出土した埴輪から古墳時代前期中葉頃と考えられます。

(三澤朋未)



## 珠城山古墳群周辺の調査（纏向遺跡第187次調査）

### 1.はじめに

纏向遺跡の東寄りの丘陵地上、珠城山古墳群と渋谷岡山古墳の間を画する谷沿いで調査となりました。調査地周辺は、かねてより布留式期の纏向遺跡の中心域と想定されていた場所にあたり、今回の調査でも古墳時代前期の遺構が検出されることが期待されました。

### 2.調査の成果

調査の結果、明確に古墳時代前期といえる遺構は確認できませんでした。しかし、古墳時代後期以降と考えられる柱穴を調査区の西寄りで複数確認しています。ここで見つかった柱穴の中には、径約50cm、深さ約25cmと規模が共通しているものがありました。これらの同規模の柱穴は約2m間隔をあけ、東西3基、南北3基で並んでいます。そこから推定すると、少なくとも2間以上×2間以上の北西方向に軸を振った構築物が存在していたようです。

調査地の南側には、古墳時代後期に築造された珠城山古墳群が存在しています。今回検出された柱穴群の詳細

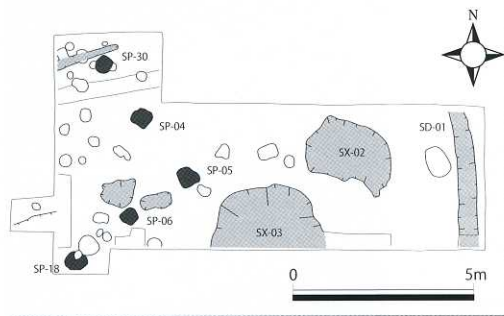


図8 調査区平面図



写真4 調査区全景（北西から）

な時期を決定することは難しいですが、古墳時代後期以降の遺構が確認されたことにより、今後の調査の進展により、珠城山古墳群と関係するような遺構や、古墳時代以後の遺構などが周辺で見つかるのではないのでしょうか。

（飯塚健太）

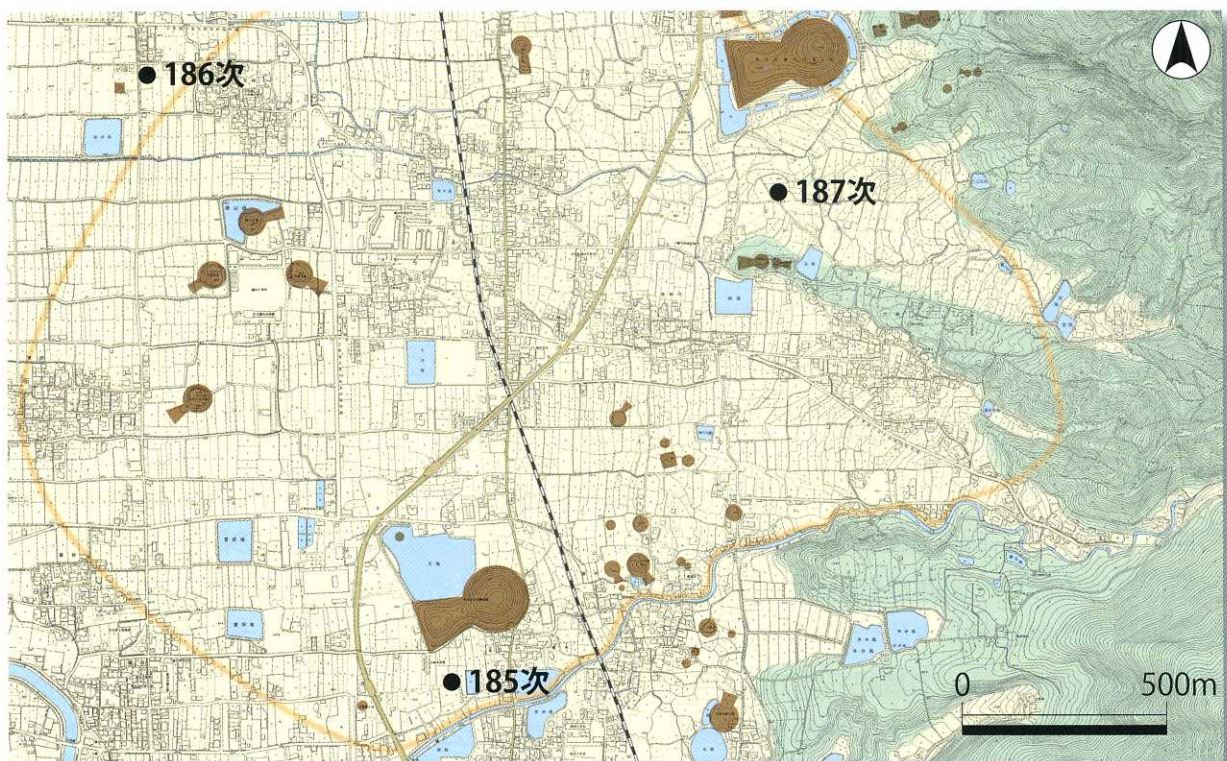


図9 調査地の位置





## 《第5回纏向学セミナー 「狗奴国から見た纏向遺跡」を開催しました！》

平成27年7月25日（土）に桜井市立図書館研修室1で纏向学セミナー「狗奴国から見た纏向遺跡」を開催しました。今回は纏向学研究センター共同研究員でNPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク理事長の赤塚次郎先生にご講演をいただき、その後纏向学研究センター寺沢薫所長と対談をおこないました。

赤塚先生は、東海地方の伊勢湾岸を魏志倭人伝に記され卑弥呼と抗争した狗奴国の本拠地と考え、S字甕と呼ばれる東海地方独特の土器や、東日本に多い前方後方墳を重視してその理由を述べられました。また、邪馬台国の所在については纏向遺跡だけでなく他の近畿地方の大規模集落遺跡についても目を向けるべきであると述べられました。

対談では東日本の前方後円墳の年代や弥生時代から古墳時代への社会変化の原因について活発な議論が交わされました。



写真5 講演される赤塚先生



写真6 討論する赤塚先生と寺沢所長

## 《桜井市纏向学研究センター東京フォーラムⅣ「卑弥呼」発見！ —宮室、楼観、城柵、巖かに設け…卑弥呼の居処—を開催しました！》



写真7 講演される武末先生



写真8 議論を交わす講師と所長

平成28年2月14日（日）に東京都千代田区一ツ橋の日本教育会館一ツ橋ホールにおきまして、東京フォーラムⅣ「「卑弥呼」発見！—宮室、楼観、城柵、巖かに設け…卑弥呼の居処—」を桜井市の主催、読売新聞社の後援により開催しました。約500人の方々にご来場いただきました。

まず森暢郎所員より報告があり、続いて福岡大学教授の武末純一先生より「考古学から見た「纏向居館」」と題したご講演を、神戸大学大学院教授の黒田龍二先生より「弥生時代から古墳時代における大型建物の発展」、国立歴史民俗博物館教授の仁藤敦史先生より「卑弥呼の宮室」と題したご講演をいただいた後、講師の皆様方に、俳優で日本考古学協会会員の荻谷俊介先生にも加わっていただき、寺沢所長の進行でシンポジウムを行いました。シンポジウムでは、卑弥呼が活躍した時代とされる3世紀前半に建てられた纏向遺跡の大形建物群を巡って様々な見解が示され、卑弥呼の居処との関係性について議論がなされました。ご参加下さった皆様、本当にありがとうございました。

## 《纏向遺跡を掘る調査員たち8》

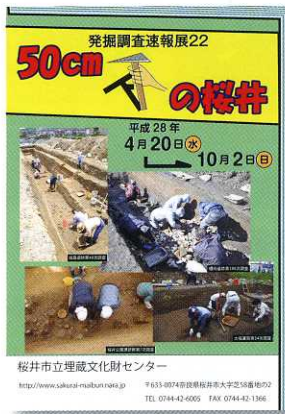
桜井市の調査員紹介コーナーです。今回は飯塚健太さんです。飯塚さんは中世の城館研究を専門とされています。今号では纏向遺跡第187次調査を紹介していただきました。

### 飯塚 健太 (いづか けんた)

平成28年度より桜井市文化財課の職員となりました。飯塚といいます。4月から職員になったとはいうものの、実はこの3月までの2年間は臨時職員として桜井市内の発掘調査等に携わっていました。私は元々、出身が関東で大学進学とともに奈良へとやってきました。桜井市の隣、天理市にある天理大学に通っていたため、桜井市から天理市にかけての奈良盆地東南部という地域には非常に縁を感じています。

纏向遺跡では今回187次調査を担当しました。纏向遺跡は全国から注目される遺跡ですが、その緊張感に負けずに、そういった遺跡の調査に携われることを楽しみながらこれから取り組んでいけたらと思います。

学生時代は中世の大和の城跡や集落の研究をしていました。なので、桜井市の中世・近世といった時代の魅力もアピールしていければと思っていますので、どうかよろしくお願いします。



## 埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成28年10月2日(日)までの期間、桜井市埋蔵文化財センター速報展22『50cm下の桜井』として、平成27年度に桜井市内で行われた発掘調査成果の速報展を行っています。今回は今号でご報告した纏向遺跡の各調査のほか、弥生時代の高地性集落である桜井公園遺跡群の発掘調査などについて展示しています。

展示開館時間 9:00~16:30(入館は16:00まで) 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日  
入館料 / 大人200円 小・中学生 / 100円 20名以上の団体は大人150円 小・中学生50円  
桜井市芝58-2 お問い合わせ先 TEL0744-42-6005



## 刊行物のご案内

纏向学研究センター紀要『纏向学研究』第4号 1000円

ガイドマップ『改訂第5版纏向へ行こう!』200円(2014年3月改訂)

高田遺跡、纏向遺跡など11件の報告『桜井市内遺跡発掘調査報告書 - 2013年度 -』500円

※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内 (公財)桜井市文化財協会までお問い合わせください。

お問い合わせ先 TEL 0744-42-6005 FAX 0744-42-1366

<http://www.sakurai-maibun.nara.jp/>

## 編集後記

今号では纏向遺跡の保存活用計画書の刊行をご報告させていただきました。調査だけでなく、今後の管理・保存や啓発事業にも一層力を注いでいきたいと考えています。

また、纏向遺跡では学術目的だけではなく、開発や住宅建設に伴う調査も行われています。小規模な調査が多いのですが、纏向遺跡を理解するうえで貴重な成果があげられています。

(M)

## 纏向考古学通信 Vol.9

発行 平成28年7月19日

編集 桜井市纏向学研究センター

〒633-0085 奈良県桜井市東田339

TEL 0744-45-0590

FAX 0744-45-0590

ホームページ 纏向学研究センターで検索!

纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄付いただいた方に配布しています。

